

論 説

剰余価値と資本主義的所有

頭 川 博

目 次

はしがき—問題の所在

- 1 資本家と個人的所有
- 2 他人労働の搾取にもとづく生産物の所有
- 3 資本主義的所有と否定の否定
- 4 先行研究の批判的検討

むすび

はしがき—問題の所在

資本主義における富の基本形態は、労働生産物の特殊歴史的な形態としての商品である。「商品は、ブルジョア的富の最も基本的な形態である。」(*Mehrwert*, *MEGA*, II/3・2, S. 458, 圏点—マルクス)しかし、資本主義は、たんなる商品生産ではなく、剰余価値を規定的な目的とする特殊な生産形態だから、商品生産によってうまれる剰余価値こそ資本主義的生産にとって特有な富の形態である。「資本の本来の独自の生産物 (das eigentliche spezifische Produkt) は剰余価値である。」(*Kapital*, III, S. 386) 資本主義にあって富の特有な形態たる剰余価値は労働者にとっては貧困をなし、その資本への再転化たる富の蓄積は貧困の蓄積を形成する。剰余価値が資本主義にとっての富の固有な形態であるとすれば、資本主義的所有とは、なによりも商品生産にもとづいてうまれる剰余価値の所有をさすことになる。資本による剰余価値の創造は、同時に資

本主義的所有の成立でもある。ところが、資本家による剰余価値の取得が資本主義的所有をあらわすとすれば、資本主義的所有の否定による個人的所有の再建とはなにかという『資本論』第I巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」で論じられたにぎやかな論争問題にあらたな光が当てられる。資本主義的所有が剰余価値創造をあらわすとすれば、その否定によって社会主義で再建される個人的所有とは、搾取の廃絶にともなう労働の全成果の労働者による取得を意味するという帰結がなりたつ。

それゆえ、本稿の課題は、剰余価値生産が資本主義的所有を形成するゆえんをかため、その否定によってうまれる個人的所有の再建とは、搾取の廃絶にともなう全生産物の労働者への帰属をさすことを論じることである¹⁾。本稿によって、個人的所有の再建とはなにかをめぐる一大論争は、エンゲルス説をふくめて、その発端のデューリングがもうけた土俵上を旋回したにすぎないという冷厳な事実があきらかになる。デューリングによるマルクス批判の支点は、社会的所有をはじめとする三つの所有形態を生産物の取得の独自の仕方ではなく生産手段の所有形態とみなす最初のボタンにあるのに、今日までの全議論は、そのかけちがえを根本前提にしてなりたつからである²⁾。

- 1) 前稿「剰余労働消滅と個人的所有の再建」(『高知論叢』第48号, 1993年)執筆以降、先行研究のプレーキは、資本主義的所有を中核とする三つの所有形態がもっぱら生産手段の所有表現だという固定観念にあるというおもいをつよめ、資本主義的所有とは剰余価値生産の表現だという命題をチーズのように熟成させた。本稿では、一つの基本概念として独立した価値をもつ資本主義的所有にかんして前稿以降つみあげた蓄積をバネに、前稿とおなじ主張に一回りおおきな厚みをくわえる。
- 2) 「この章(第24章-頭川)で問題とされている〈所有〉問題は、…すべて、生産手段の所有にかかわっている。」(竹内芳郎「われわれにとって『資本論』とは何か」[上]『思想』第550号, 1970年 所収, 29ページ, 圏点-竹内氏)

1 資本家と個人的所有

資本主義では、商品は生産物の一般的形態であるから、自己労働にもとづく所有すなわち個人的所有は、たんに歴史的に過去の独立生産者に妥当するだけ

でなく、商品生産者であるかぎりでの資本家にもあてはまる。そこで、本節で、全面的に発展した商品流通として剰余価値生産の基礎をなす単純流通上では、個人的所有が資本家にも妥当する理由をときあかす。

資本主義では、生産活動の結果が商品であるだけでなく、生産活動の前提もまた商品をなし生産過程にはいりこむ。つまり、資本家は、生産過程をはじめにさいして、生産手段のみならず労働力もまた商品として単純流通から買入れねばならない。「資本は、自身の再生産条件を市場にある商品として見いだす。」(『資本の流通過程』大月書店、中峯・大谷他訳、59ページ)「生産物の要素はすべて、流通から商品として生産行為のなかにはいる。」(MEGA, II / 3・6, S. 2143, 圏点-マルクス)まさに、商品は生産物の一般的な形態をなし、商品生産が資本主義の一般的な形態である。「商品生産の絶対的形態である資本主義的生産」(Kapital, III, S. 650)。資本主義の生産活動は、商品の再生産過程である。ここで、資本家が単純流通で入手する労働力は、物質的には資本家が生産手段のほかに所有する生活手段に還元されるから、資本家の所有する資本は、素材的にみれば生産手段と生活手段とで構成される生産条件からなりたつ。そこで、資本は、価値的には資本家の自己労働の結晶だと前提すれば、生産手段はもちろん労働力もまた資本家の所有する自己労働の転化形態だから、その必然的な帰結として、生産的消費の結果うまれる生産物は資本家の所有物になる。生産物が資本家の所有物になるのは、生産要素のすべてとりわけ労働力の生産的発揮である労働そのものが自己労働の転化形態をなし資本家の所有に帰属するからである。逆にいえば、労働者にとっては、流動状態にある労働は自己の労働力から支出されながら自分には所属せず資本家のものである。「労働者の労働は、生産過程にはいつてしまえば、それ自身資本価値の一つの存在様式である。」(Resultate, MEGA, II / 4・1, S. 63, 圏点-マルクス)「労働者にとって対象化されるものは、他人のものとしての労働の対象化である。」(ibid., S. 90, 圏点-マルクス)「労働能力にとっては、自分自身の労働が他人のものである。」(MEGA, II / 3・6, S. 2284)生産手段と労働力とは資本家に帰属するから、生産手段とむすびついた労働力の合目的な消費の結果としての生産物は自動的に資本家のポケットにはいる必然性をもつ。生産手

段と労働力からなる生産要素が資本家に帰属する自己労働の転化形態だとすれば、その要素の消費過程である労働過程そのものが資本家に帰属する直線的な帰結として、その生産物は資本家の所有物になる¹⁾。

こうして、生産活動の前提としての生産条件は、資本家に所属する自己労働がたんにその存在形態をかえる帰結として生産物になることから、生産活動の結果うまれる生産物は、直接生産者である労働者ではなく資本家の所有物になる。だから、生産条件は、資本家の自己労働の存在形態として商品生産者たる資本家の個人的所有に帰属するとすれば、生産物もまた、同じ資本家の自己労働のたんなる存在形態の変化として個人的所有に所属する。生産条件と生産物とは、商品生産者としての資本家の個人的所有を代表する二種類の物質的財貨である²⁾。それゆえ、資本家が単純流通で商品生産者としてあらわれるかぎりでは、自己労働にもとづく所有と規定される「個人的所有 (das individuelle Eigentum)」(*Kapital*, I, S. 791) は資本家にも普遍的に通用する。

ところで、自己労働にもとづく所有というばあい、その所有対象は直接には労働成果である商品としての生産物である事実³⁾に細心の注意を要する。というのも、商品生産の絶対的な形態たる資本主義では、商品としての生産物こそ富の基本形態だからである。生産条件の所有は、富の基本形態たる商品としての生産物をつくるための前提条件にすぎない。商品としての生産物こそ富の基本形態であるがゆえに、その生産物こそ所有対象としての富にはかならない。商品としての生産物は、資本主義における富の基本形態であるがゆえに、資本家にとっての個人的所有を代表する。「自己の労働の生産物にたいする私的所有」(*Grundrisse*, MEGA, II/1・2, S. 412) とか「自己労働による商品の領有」(*ibd.*, MEGA, II/2, S. 50) または「ブルジョア社会の根本前提」(*ibd.*, S. 49, 圏点-マルクス) としての「自己労働の成果にたいする所有」(*ibd.*, 圏点-マルクス) といわれるゆえんである。「所有と労働との分離」(*Kapital*, I, S. 610) は労働成果である生産物と労働者との分離をあらわすとすれば、それに転化する自己労働にもとづく所有とおなじものとしての「労働と所有の同一性」(*Grundrisse*, S. 377) は、自己労働によってつくられた生産物の取得を表現する。だから、自己労働にもとづく所有とは、直接には、自己労働にも

とづく生産物の所有の簡略化された表現である。といっても、自己労働による生産物は価値的にみてその生産に消費された生産条件を補填する物質的な要素を内蔵するから³⁾、自己労働にもとづく所有という規定は、生産者による生産条件の所有という契機を排除しない。自己労働にもとづく所有が直接には自己労働にもとづく生産物の所有の簡略化だという事実は、それが「自分の労働によって得たいわば個々独立の労働個体とその労働諸条件との癒合にもとづく私有」(*Kapital*, I, S. 790) といういいかえからもうらづけられる。このばあい、生産者が生産手段との結合にもとづいてなにを所有するかといえば、その所有対象は、労働成果としての生産物以外にはありえない。生産者と生産手段との結合にもとづく所有が生産者による生産手段の所有を表現するとすれば、それこそ背理になる－「生産者と生産手段との結合による生産手段の所有」－。「所有と労働との分離」とは「労働と労働の生産物の所有の分離」(*Grundrisse*, S. 226) = 「労働と富との分離」(*ibid.*) である。だから、自己労働にもとづく所有が「所有と労働の同一性」という別表現をとるばあいの「所有」も、生産条件ではなく労働の成果としての生産物を表現する⁴⁾。また、マルクスが『資本論』第I巻第24章第7節の冒頭で以下のようにいふばあひも、資本の生成によって解消される「自分の労働にもとづく私有」とは、自己労働にもとづく労働成果としての生産物所有をあらわす。

「資本の本源的蓄積すなわち資本の歴史的生成は、どういうことに帰着するであろうか？それが奴隷や農奴から賃金労働者への直接の転化つまり単なる形態転化でないかぎり、それが意味するものは、ただ直接的生産者の収奪すなわち自分の労働にもとづく私有の解消でしかないのである。」(*Kapital*, I, S. 789) ここで、「直接生産者の収奪」とは、生産条件と労働者との分離をさすと解されるが、それと「すなわち」でつながれた「自分の労働にもとづく私有」は、生産条件の所有を前提に規定される労働の全成果の取得をさす。本源的蓄積は、生産条件の所有の面とそれに規定される生産物の取得の面のペアからなりたつ個人的所有を全体として止揚する役割をはたす。つまり、本源的蓄積の役割は、生産条件の所有とそれに規定される生産物の取得の二つの面からなりたつ個人的所有の全体としての否定に帰着する。資本主義の廃絶は、生産条件と労働者

との結合を回復させるとともに、搾取の解消によって労働にもとづく生産物の所有をとりもどす両面の役割をはたすのとおなじである。

以上、本節で、資本家がたんなる商品生産者としてあらわれる単純流通上では、資本家の支配する生産活動にも、自己労働にもとづく生産物の所有としての個人的所有があてはまるしくみをといた。最初の個人的所有をあやまればその否定の否定であやまった結論をうることは、三段跳びでのふみきりの失敗とおなじである。

- 1) 「労働能力にとって生産物もまた、他人の原材料・他人の用具・他人の労働の結合物として—他人の所有物として—現われる。」(MEGA, II/3・6, S. 2287, 圏点—マルクス)
- 2) 「資本主義的生産様式は労働条件にも労働生産物にも独立化され疎外された姿を与える」(*Kapital*, I, S. 455)というとおり、資本主義での社会的な富の対立的性格は、生産条件と生産物の両面の所有にあらわれる。だから、資本主義的所有は、生産条件と生産物のそれぞれにたいしてなりたつ。問題は、資本主義的所有が文脈におうじてあらわす内容いかにある。従来の根本欠陥は、資本主義的所有を資本家による生産条件の排他的所有で代表させる既成観念にある。
- 3) 「生産の前提として現われるいっさいの契機は同時に生産の結果である。」(*Grundrisse*, S. 601, 圏点—マルクス)「生産過程を再生産過程に転化させるものは、生産物がその生産諸要素に再転化されるということである。」(MEGA, II/3・6, S. 2245, 圏点—マルクス)
- 4) 「自己労働にもとづく所有が、流通の内部では、他人労働の領有の土台をなしている」(MEGA, II/2, S. 48, 圏点—マルクス)というさいも、等価物をなす自己の商品の譲渡によってのみ他人の商品を領有できることからわかるように、「自己労働にもとづく所有」とは自己労働の成果としての生産物の所有をさす。また、資本となる富の所有は本源的には自己労働にもとづく所産としてあらわれる事実から、自己労働にもとづく所有の対象はもっぱら生産条件だと観念されがちな傾向をもつ。しかし、資本主義社会を前提すれば自己労働によってなりたつ所有対象はまずもって生産物であって、それをとおして剰余価値の結晶としての生産条件からなる富の所有が成立する先後関係にある。

2 他人労働の搾取にもとづく生産物の所有

前節では、商品生産としてみた資本主義において自己労働にもとづく生産物の所有としての個人的所有がなりたつ脈絡をかためた。ところが、個人的所有の資本家にたいする妥当性は、あくまで資本家を商品生産者として抽象化したかぎりでの規定にすぎない。単純流通の基礎上に必然的に剰余価値生産がなりたつ関係と対応して、単純流通での個人的所有は、剰余価値創造によってその正反対物である資本主義的所有にとってかわられる。本節では、単純流通上で商品生産者としてみた資本家に妥当する個人的所有は、剰余価値生産によって、自動的に他人労働の搾取にもとづく生産物の所有としての資本主義的所有へと転回するメカニズムを考察する。

生産活動の開始にあたって、資本家は、生産手段はもちろん労働力も商品として単純流通から買うが、労働力の売買は、社会的富の対立的な所有関係つまり資本家による生産条件の排他的な所有を根本前提としてなりたつ。そこで、労働力の価値とひきかえにえられたその使用価値の生産的消費は、なるほど資本家に帰属する自己労働の姿態変換をもたらすが、資本家による生産条件の排他的な所有をふまえれば、たんなる個人的所有とは正反対の内容に変質してあらわれる。すなわち、独立生産者のばあい、生産条件を所有することから蓄積財源のための労働支出をふくむ1日の労働日全体が生産規模拡大をになう当事者の再生産に要する必要労働を形成する。一方、労働者は生産条件から分離される直線的な結果として労働力だけを再生産する必要性に限定されるため、賃労働者にとっての必要労働は労働力の再生産に要する消費財生産のためだけの労働分量にせまく圧縮される。資本家は、労働力の売買にさいしてその再生産だけに限定された労働力の価値を支払う半面、入手した労働力の使用価値は1日の使用権をふくむ関係上、その生産的消費にあたっては支払った労働力の価値にひとしい必要労働の支出時間分をこえて労働日を合法的に延長する¹⁾。資本家の支配のもとで労働日が必要労働をこえて延長されれば、生産過程の結果、資本家は、労働日のうち必要労働の超過分である剰余労働を等価物なしに取得

することになる。けだし、労働力は生産過程にあつては資本家に帰属する可変資本であるから、その生産的發揮による労働支出は資本家に所属する一方、その生きた労働のうち必要労働をこえる剰余労働は、労働者にたいする対価の支払いのない無償労働だからである。生産過程での労働力は可変資本をなしその消費による労働が資本家に帰属するがゆえに、剰余価値生産とは、資本家による支払いなしでの他人労働の取得にひとしい。したがって、資本家の支配のもとでの生産過程では、自己労働にもとづく生産物の所有という外観のもとで等価物なしでの他人労働の取得がなりたつ。「最初の剰余価値形成すなわち等価物なしでの他人労働の取得」(MEGA, II / 3・6, S. 2218) とか「搾取すなわち他人の不払労働の取得」(Kapital, III, S. 399) とかいはれるとおりでである。「剰余価値の生産は、…現実の生産過程における剰余労働の生産、不払労働の取得にほかならない。」(Resultate, S. 54, 圏点—マルクス)ここで、剰余価値こそ資本主義における富の特有な形態だから、等価なしでの他人労働の獲得という独特な仕方をあらわす資本主義的取得様式は、取得対象の面からみれば資本主義的所有を形成する(剰余価値生産→資本主義的取得様式→資本主義的所有)。あるいは、剰余価値生産が資本主義における特殊歴史的な富をうみだす因果をふまえれば、資本家にとって富の取得はイコール資本主義的所有の形成になる。資本主義的所有とは、なによりも資本家にとっての富の取得をあらわす。「資本すなわち他人労働の生産物にたいする私的所有」(Manuskripte, MEGA, I / 2, S. 338, 圏点—マルクス)という注目すべき文言に示されるように、資本主義的所有は、資本の本質的な機能である剰余価値創造によって代表される。資本は、剰余価値という特殊歴史的な富の取得によって資本主義的所有を実現する。資本主義的所有とは、剰余価値生産の別名にほかならない。資本家にとっての富の形成をさしおいた資本主義的所有の議論²⁾には、資本にとって剰余価値創造こそその本質的な機能である面からみて、本末転倒がある。「資本は労働とその生産物とにたいする支配力である。」(ibid., S. 339, 圏点—マルクス)

だから、一步すすめていえば、「資本主義的所有(das kapitalistische Eigentum)」(Kapital, I, S. 791)と同義語としての他人労働の搾取にもとづく所有とは、

直接には剰余価値生産すなわち他人労働の搾取にもとづく生産物の資本家による所有をさす。たとえば、第24章第7節には、「自分の労働によって得たいわば個々独立の労働个体とその労働諸条件との癒合にもとづく私有」との対応関係で、本源的蓄積によって「他人の労働ではあるが形式的には自由な労働の搾取にもとづく資本主義的私有」(*ibid.*, S. 790)が生成する旨の一文がある。ここからも、他人労働の搾取にもとづく所有とは、自己労働にもとづく生産物の所有の転化形態として、生産物の面から規定された剰余価値創造の別表現であることがうらうちされる³⁾。また、マルクスは、第25章「近代植民理論」の冒頭で、つぎのような規定をあたえている。「経済学は二つの非常に違う種類の私有を原理的に混同している。その一方は生産者自身の労働にもとづくものであり、他方は他人の労働の搾取にもとづくものである。」(*ibid.*, S. 792)ここで、生産物こそ「生産者自身の労働にもとづく」か「他人の労働の搾取にもとづく」その成果としての所有対象であるがゆえに、相異なる二種の私有としての個人的所有と資本主義的所有は、自己労働にもとづく生産物の所有と他人労働の搾取にもとづく生産物の所有として規定される。換言すれば、商品としての生産物が資本主義での富の基本形態だから、自己労働にもとづく生産物の所有や他人労働の搾取にもとづく生産物の所有という労働成果の面に着目した所有規定こそ、個人的所有や資本主義的所有を代表する。『共産党宣言』で、「近代のブルジョア的な私的所有」(*Manifest, Werke, Bd. 4, S. 475*)は「人による人の搾取にもとづく生産物の生産と取得の最後の最も完成された表現」(*ibid.*)と規定される。

ちなみに、「剰余価値を生産する価値」(*Kapital, II, S. 35*)という資本の概念規定が明示するとおり、資本主義的所有が他人労働の搾取にもとづく生産物の所有で代表されるのは、資本がその本質的機能である剰余価値生産で表現されるのとおなじである。マルクスは、「資本の概念のうちにある対象化された労働による生きた労働の取得」(*Grundrisse, S. 572*)というように、資本をもって等価なしでの他人労働の取得というその中心的機能で規定している。資本が剰余価値生産で表現されるのと資本主義的所有が剰余価値取得で表現されるのとはおなじである。

以上、本節で、単純流通から剰余価値生産への移行に対応して、自己労働にもとづく生産物の個人的所有が同時に他人労働の搾取にもとづく生産物の資本主義的所有へと転変するすじみちを解析した⁴⁾。資本主義的所有は、おなじ資本家のもとで個人的所有を基礎になりつつ一方、等価なしでの他人労働の取得をふくむ面で「富の取得の新しい形態」(*Mehrwert*, *MEGA*, II / 3・4, S. 1249, 圏点-マルクス)である。先回りすれば、資本主義的所有のつぎの「社会的所有 (*gesellschaftliches Eigentum*)」(*Kapital*, I, S. 791)をふくめた三つの所有形態は、それぞれの生産形態に特有な富の形態の面からみた取得方法にはほかならない。

- 1) 剰余価値をうむ価値という資本概念には、労働力が生産条件からの分離によって はじめて剰余労働をうむという社会関係が包含されている。資本は、それが価値であることによって剰余労働を創造する。「価値が剰余価値をつけ加える運動は、価値自身の運動であり、価値の増殖であり、したがって自己増殖である。」(*ibid.*, S. 169, おなじ趣旨の一文は, *Resultate*, S. 123にもある)。マルクスの資本概念には、名人の芸談のような味わいぶかいコクがある。
- 2) 「賃労働を搾取する所有」(*Manifest*, S. 475)というばあいの所有すなわち資本主義的所有は、資本家による生産条件の排他的所有をさす。
- 3) だから、資本主義的所有とは剰余価値生産の表現であるかぎり、資本主義的所有を論じることは資本主義の社会関係を説明することにひとしい(『哲学の貧困』国民文庫、高木佑一郎訳、207ページ)。
- 4) 資本家という同一の主体のもとで個人的所有と資本主義的所有とがかさなる関係は、つぎのマルクスの文言にもしめされる。「自己の労働の生産物の私的所有は、労働と所有との分離と同一である。」(*Grundrisse*, S. 160)

ここで「自己の労働の生産物の私的所有」という表現がしめすとおり、自己労働にもとづく所有の対象は、労働の成果としての生産物である事実が検証される。

3 資本主義的所有と否定の否定

前節では、資本主義という同一の基礎上で個人的所有が資本主義的所有へと転化する内面的な関連をといた。ところが、他人労働の搾取にもとづく生産物の所有としてあらわされる剰余価値生産が資本主義的所有を代表するとすれば、

資本主義廃絶にともなう個人的所有の再建という『資本論』第Ⅰ巻全体の最終命題の含意もおのずからとける。そこで、本節では、資本主義的所有が剰余価値の創造を表現するという立場にたつて、個人的所有の再建とは、労働者による全労働成果の取得という本源的な個人的所有のもつ本質的な契機の復活を意味する根拠を提出する。

すでにのべたように、第24章第7節冒頭で、本源的蓄積の役割は「自分の労働にもとづく私有の解消」すなわち労働者による全労働成果の取得の否定にあると明言的に規定される。つづいて、「自分の労働によって得たいわば個々独立の労働個体とその労働諸条件との癒合にもとづく私有」は「他人の労働ではあるが形式的には自由な労働の搾取にもとづく資本主義的私有」におきかわる旨、本源的蓄積のはたす役割があらためてふえんされる。マルクスによれば、資本の歴史的生成による個人的所有の資本主義的所有への転化は、自己労働にもとづく生産物の所有から他人労働の搾取にもとづく生産物の所有への転化にひとしい。そのあと、高度な生産力と生産関係との矛盾の深化による資本主義廃絶後の社会的所有について、つぎのように論じられる。

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式したがってまた資本主義的私有も、自分の労働にもとづく個人的な私有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす。それは否定の否定である。この否定は、私有を再建しはしないが、しかし、資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有をつくりだす。すなわち、協業と土地および労働そのものによって生産される生産手段の共同占有(Gemeinbesitz)を基礎とする個人的所有をつくりだすのである。」(ibid., S. 791)

社会的所有の内面での個人的所有の再建をめぐる最大のポイントは、係争問題文中の最初の「資本主義的私有」=資本主義的所有とはなにかにある。ただし、個人的所有の再建は、前提としての資本主義的所有という直前の対象を否定した結果だからである。ここで、資本主義的所有とは、それが資本主義的取得様式と同義語をなす文脈からもわかるように、剰余価値生産とおなじものとしての他人労働の搾取にもとづく生産物の所有をさす。「資本主義的生産様式

から生まれる資本主義的取得様式¹⁾とあるように、資本主義的取得様式が資本主義的生産様式によって規定され生産活動の結果としての等価なしでの他人労働の取得を意味することから、それと同義の資本主義的所有は、生産活動の結果としての剰余価値生産をさすという合理的な推論がなりたつ。また、資本主義的所有が剰余価値生産をさすことは、それと「自分の労働にもとづく個人的な私有」との対応関係からもうらづけられる。「自分の労働にもとづく個人的な私有」とは、直前の「自分の労働によって得たいわば個々独立の労働個体とその労働諸条件との癒合にもとづく私有」すなわち自己労働にもとづく生産物の所有とおなじだからである。ようするに、最初の一文では、剰余価値生産にしめされる資本主義的所有は、自己労働による全成果の取得からなる個人的所有の否定であるといわれる。つづいて、資本主義的所有の否定は、生産条件の共有などの資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有の再建をうみだすという懸案の命題が提起される。ここで、まず『資本論』で「生産様式 (die Produktionsweise)」（*ibd.*, S. 334）とは、生産条件の所有に規定された特定の生産方法をさし、労働過程と生産関係という二つの要素の統一からなりたつ²⁾から、「協業と土地および労働そのものによって生産される生産手段の共同占有」は、大規模協業と生産条件の共有との立体的な統一からなる「結合生産様式」（*ibd.*, III, S. 456）または「結合労働の生産様式」（*ibd.*, S. 621）をあらわす³⁾。そうだとすれば、その結合生産様式がなぜ「資本主義時代の成果 (die Errungenschaft)」であるかその含意いかんがとわれる。マルクスにあっては、結合生産様式は、それ自体が資本主義的生産の内在的な産物をなす点で資本主義という母胎からの成果としてとらえられる。共同社会が「資本主義時代の成果」であるとは、それが資本主義という生産形態自身がはぐくんだその所産だということにほかならない。未来は現在のなかにその姿を隠している。「ブルジョア経済の最後の成果 (Resultat) であるそれ自身の否定⁴⁾」（*Grundrisse*, S. 589）という文言がしめすように、資本主義の否定をあらわす結合生産様式は、資本主義それ自体の結果である。結合生産様式が「資本主義時代の成果」であるとは、「資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす」というその前の一文と同義にすぎない⁵⁾。そこで、

再建される個人的所有の基礎が結合生産様式をあらわすとすれば、資本主義的生産様式による資本主義的所有の規定とおなじように、結合生産様式によって資本主義的所有の否定としての社会的所有が規定される関係にたつ。資本主義的生産様式に対応する資本主義的所有が他人労働の搾取による所有という性格規定を付与されたのとおなじように、協業と生産手段の共有からなる結合生産様式の基礎上的個人的所有の再建とは、結合生産様式に対応した社会的所有のもつ富の取得の面からみた特有な性格規定である。結合生産様式に対応した社会的所有にあつては全生産物が労働者によって所有されるから、その基礎上的個人的所有の再建とは、個人的所有のもつ全生産物の労働者への帰属というその本質的な要素の再生を表現する。個人的所有に内包される全生産物の労働者による所有という要素は、他人労働の搾取にもとづく生産物の所有としての資本主義的所有によって否定される一方、資本主義的所有の否定つまり否定の否定によって結合生産様式という高次の生産形態のなかで回復される。ちなみに、『共産党宣言』では、「共産主義の特徴」(*Manifest*, S. 475)は「ブルジョア的所有の廃棄」(*ibd.*)だという規定があるが、ここで「廃棄」される「ブルジョア的所有」とは他人労働の搾取による生産物の所有をさす⁶⁾。それだから、社会的所有のなかでの個人的所有の再建問題の扇のかなめは、資本主義的生産様式に対応する資本主義的所有とはなにかの確定にある。フランス語版『資本論』では、論争問題の最初の一文はつぎのようになっている。「資本主義的生産様式に適合する資本主義的取得は、独立した個人的労働の必然的帰結にはかならない私的所有の第一の否定である。」(*Le Capital*, 1872-75, p. 342)ここで、「資本主義的取得」も「独立した個人的労働の必然的帰結にはかならない私的所有」も、ともに生産物の所有の面からの規定だという内実をもつ。

ひるがえっていえば、資本主義廃絶後の個人的所有の再建が労働者による全労働成果の取得の表現であるのは、資本主義の回転軸が剰余価値創造にある事実と一義的に対応する。資本主義の本質的な機能が剰余価値生産にあるがゆえに、他人労働の搾取にもとづく生産物の所有の否定は、搾取の廃絶と同義の個人的所有の再建を形成する。したがって、個人的所有の再建問題が社会主義の基本性格をめぐる議論されるさい、ひとは、資本主義的所有に表現される資

本主義の基軸とはなにかがとわれているのである。資本主義の大黒柱が剰余価値生産にあるとすれば、資本主義的所有の否定によって再建される個人的所有は搾取の廃絶にある。

以上、本節で、懸案の問題文の資本主義的所有は剰余価値生産の表現だという理解をテコにして、その否定による個人的所有の再建とは、全労働成果の労働者による取得をさすことをみちびきだした。

- 1) 「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式」は、『資本論』初版(1867年刊)と第2版(1872年刊)では、「資本主義的な生産・取得様式 (die kapitalistische Produktions-und Aneignungsweise)」(MEGA, II /6, S. 683)となっている。「資本主義的な生産・取得様式」と「自己の労働にもとづく生産・取得様式」(Kapital, I, S. 793)とは対応関係にある。「資本主義的な生産・取得様式」は、一般論としては「ある特定の独自の生産様式に対応する種類の取得の法則」(Mehrwert, S. 1818)とおなじである。また、ここで資本主義的生産様式から生まれる資本主義的所有が否定されて個人的所有の再建がもたらされるというのだから、資本主義的所有をはじめ個人的所有もまた生産様式の前提としての生産条件の所有を意味しない事実が検証される。生産条件への関係行為をもって「所有の第一概念」(平田清明『市民社会と社会主義』岩波書店, 1969年, 80ページ)というフォルメンの文言(Grundrisse, S. 395)に依拠した立論は、第24章第7節では成立しない。資本主義的生産様式にもとづく所有こそ第7節の問題対象である。生産条件への関係行為すなわち生産条件の所有は、資本主義的生産様式から生まれるのではなく、その生産様式をなりたさせるのである。
- 2) 拙稿「生産条件の所有と生産様式」『高知論叢』第77号, 2003年 参照。
- 3) だから、「協業と土地の共有と労働そのものによって生産される生産手段の共有」が生産手段の社会的所有をあらわすというエンゲルス説の根拠づけはなりたさない。
- 4) 「賃労働と資本との否定の物質的・精神的諸条件は、それ自身が資本の生産過程の結果である。」(Grundrisse, S. 623)
- 5) 「資本主義時代の成果」と「協業と土地および労働そのものによって生産される生産手段の共同占有」とが同格であるため、両者を資本主義体制内部の事態とみなす反対論がある。その異論によれば、「生産手段の共同占有」は資本主義での労働者による集団的な生産的消費をさすと主張する。「資本家的私的所有は、それ自体が形成する協業と、同じくそれ自体が形成する生産諸手段の事実上の社会的所有によって、特徴づけられる。」(平田清明『市民社会と社会主義』70ページ, 圏点・平田氏) そうであるとすれば、第一に、協業は労働過程での労働者による生産手段の共同使用と同義だから、「協業と…生産手段の共同占有」という表現からいって、マルクスは同義反復の愚をおかしたことになる。ここには、労働過程と生産条件の

所有という二つの要素からなりたつ生産様式概念がドロップしている。第二に、生産手段の共同占有が労働力による集団的な生産的消費をさすというのは、労働力と生きた労働とが資本家の所有に帰属する価値増殖過程のたんなる労働過程への解消である。「労働力は、可変資本が生産過程のなかでとっている形態である」(*Kapital.*, S. 616)といわれるとおり、生産過程では労働力が資本家に所属するのに、労働者が生産手段を占有するというのは、西から日がのぼるといふとおなじ背理である。生産手段の占有を労働力によるその生産的消費と同義とみなす主張には、価値増殖過程の観点がない。労働者による生産手段の占有という性格が価値増殖過程では妥当しないのに資本主義での規定だといふのは自家撞着である。

- 6) マルクスは、後段で「廃止」(*Manifest*, S. 476)の対象は「労働者が資本を増殖するためだけに生きる…取得のみじめな性質」(*ibid.*)だといっている。

4 先行研究の批判的検討

前節で、資本主義的所有の社会的所有への転化にともない全生産物の労働者による所有がなりたち、個人的所有の再建が達成される道理をときほぐした。ところが、従来、論争問題冒頭の資本主義的所有とは剰余価値創造をさす事実の閑却に起因して、社会的所有のなかでの個人的所有の再建にこめたマルクスの真意が解決されていない。本節では、問題のカギをにぎる資本主義的所有をもって生産物の取得をふくむひろい概念として把握する観点にたちつつも剰余価値生産と理解しないため、社会主義における生活手段の個人的所有を強調するエンゲルス説を検討する。

エンゲルス説を代表する論客の林直道氏は、生産手段の社会的所有にたいする個人的所有の再建＝生活手段の個人的所有というエンゲルス説をもって、以下のように根拠づけられる。すなわち、個人的所有の再建を論じた問題の箇所では、生産手段の所有のみならず、それに対応した生産物の取得様式も論じられ¹⁾、本源的な個人的所有では「自己労働の生産物の労働者自身による取得」(『個人的所有の再建』とは何か『経済』第33号、1998年、77ページ、圏点－林氏)がなりたつ。これにはんして、資本主義的所有では、「労働者は生産手段とともに自分の労働の生産物の所有をもうばわれる」(同ページ、圏点－林

氏)。個人的所有の資本主義的所有への転化にさいしては、労働者による生産物の所有からその正反対の無所有への転化が生じる。資本主義的所有は、全生産物が直接生産者たる労働者からは排除され資本家の所有物に転化する点で個人的所有とは対極的な取得様式をふくむ。最後に、資本主義が廃絶されれば、生産手段は労働者全体の社会的所有にうつる一方、生活手段の個人的所有への移行によって社会主義で個人的所有が再建される。まさに「資本主義の廃絶の目的」(81-2 ページ, 圏点-林氏)は生活手段の個人的所有の実現にある。総じていえば、個人的所有→資本主義的所有→社会的所有という生産手段の所有形態の転変の反面において、所有→無所有→所有という労働者による生産物の所有形態がなりたつ。

エンゲルス説にたつ林氏の主張は、資本主義的所有を軸とする所有形態を生産物の取得様式の観点からも理解しようところみる面で、三つの所有形態を生産手段の所有の面にもつばら着目してとらえる立論²⁾に比して一步前進である。しかし、肝心かなめの問題は、資本主義的所有を資本家による全生産物の支配ととらえるその理解にある。林氏は、所有と労働の分離が商品生産の所有法則に表現される所有と労働の同一性からの帰結になるという『経済学批判要綱』での資本主義的取得法則の説明箇所をその決定的な典拠にされる。

「資本と賃労働とはがいはる諸関係を所有諸関係または諸法則として表現するには、価値増殖過程における双方の側からのかかわりを取得過程として表現しさえすればよい。たとえば、剰余労働が資本の剰余価値として措定される、ということは、労働者が自分自身の労働の生産物を取得しないということ、つまり彼にとってこの生産物が他人の所有物として現われ、逆に他人の労働が資本の所有物として現われる、ということの意味する。ブルジョア的所有のこの第二法則は、第一法則が転回してなったものである(る)。… 第一法則とは、労働と所有との同一性であり、第二法則とは、否定された所有としての労働あるいは他人の労働の他者性の否定としての所有である。」(Grundrisse, S. 377, 圏点-マルクス)

しかし、生産物が全部資本家に帰属する関係は、それ自体すべての生産要素をみずから投下してその生産物とその生産者に帰属する個人的所有と共通な契

機にすぎない。つまり、資本主義的所有＝資本家による全生産物の支配という立場では、個人的所有と資本主義的所有とは、後者が前者を否定してなりたつという関係にない。なるほど、生産過程の結果、生産物は全部が資本家に帰属するけれども、「取得過程」としての「価値増殖過程」をもって労働力の価値の支払いをふくめた生産過程の全体を射程におさめれば、等価なしでの他人労働の帰属こそが資本主義的所有のもつ特有な要素になる。「交換なしでの他人労働の取得、労働と所有の完全な分離³⁾」(ibid., S. 412, 圈点ーマルクス)という表現がしめすとおり、所有と労働の分離とは、投下されたすべての労働が自己の所有につながる両者の同一性とは反対に、支出された労働が他人の所有をつくりだす特有な関係すなわち等価なしでの他人の不払労働の取得にひとしい。『資本論』第I巻第22章第1節で、所有と労働との分離と同義の資本主義的取得法則は、資本の実体が実は剰余価値だという点の明示によって、その完成形態がしめされるにすぎない。資本主義的取得法則とは、本質的に剰余価値生産にはかならない。資本の実体が剰余価値であるか否かに関係なく、剰余価値生産は、他人労働の搾取のもとづく生産物の所有を結果する資本主義的取得法則したがって資本主義的所有を形成する。だから、個人的所有をこえる資本主義的所有の独自性は、資本家による等価なしでの生産物の取得にある。資本主義的所有は、それが非労働主体による等価なしでの不払労働の取得であるがゆえに、自己労働による生産物を取得する個人的所有の否定になる。資本主義的所有を資本家による全生産物の所有とみなす議論には、他人労働の搾取という資本主義に特有な要素の脱落がある。「所有と労働との分離」が全生産物の資本家による所有にふくまれる等価なしでの他人労働の取得をあらわすとすれば、資本主義的所有の否定は他人労働の搾取そのものの解消に帰着する。「所有と労働の分離」の否定は、他人労働の搾取の止揚をもたらすが、それをとびこえて生活手段の個人的所有を帰結することはありえない。

ちなみに、資本主義廃絶の目的を生活手段の個人的所有にもとめる主張は、資本主義そのものの理解のゆがみとなって集約される。生活手段の個人的所有に資本主義廃絶の目的をおくことは、搾取こそ資本主義のかなめであると同時に資本主義と社会主義とのあいだの決定的相違でもある急所の抹消である。資

本主義の廃絶とは、労働者が生産条件の所有によって生産活動の主体に転化する一方、全労働の成果の取得によって労働苦と生活苦からなる貧困から解放されることである。エンゲルス説にたつ林氏の立論にあって、資本主義的所有のとりちがえこそ、搾取の解消という資本主義廃絶の目的からのずれの源泉である。

以上、本節で、資本主義的所有を全生産物の資本家による取得と解する林氏によるエンゲルス説擁護の中心的論拠には、等価物なしでの不払労働の取得という高次の契機がぬけおちている陥穽を分析した。

さかのぼっていえば、エンゲルスは、『資本論』に批判のほこさきをむけたデューリングにたいして、つぎのようにきりかえすべきであった。すなわち、デューリングは、資本主義的所有の否定によってなる社会的所有が同時に個人的所有の再建だというマルクスの規定にたいして、生産手段の社会的にして個人的な所有というのは二つの異質で融合しない要素を合成する点で瓢箪にナマズのようなつかまえがたい主張だと批判した。ところが、第24章第7節では、社会的所有をはじめとする三つの所有形態は、生産手段の所有ではなく、特定の生産様式における富の所有の独特な仕方をあらわす。だから、労働者による富の取得の特有な表現である社会的所有は、出発点にある個人的所有のもつ本質的な要素を復活させその否定の否定をなりたさせる、と。本稿の立場からすれば、デューリングとエンゲルスとのあいだの批判と反批判を原型とする今日までの議論はすべて、前者のもうけた土俵上での『資本論』に背反した対立にすぎない。社会的所有を生産手段の所有とみなすデューリング説の核は、先行研究にたちはだかる堅牢不落の内なる城壁である。個人的所有の再建をめぐる先行研究は、孫悟空がお釈迦さまのてのひらからとびだせなかったエピソードをおもいださせる¹⁾。

- 1) エンゲルス説は、資本主義的所有が剰余価値生産を代表するという問題解決の根本前提を原理的に排除する。資本主義的所有の否定である社会的所有は生産手段の所有形態にかかわるからである。資本主義的所有のばあいとおなじように、社会的所有とは、労働者による富の取得の特有な仕方をあらわす社会主義的所有と等価である。社会的所有でも社会主義的所有といってもともに生産手段の所有にかかわるという反論は、資本主義的所有を生産手段にのみとめ生産物にはみとめない立場と同一である。だから、ここでの評価は限定的である。

- 2) 個人的所有を労働者による生産手段の所有と解すれば、その否定になる資本主義的所有や否定の否定でうまれる社会的所有もまた、直線的に生産手段の所有にかかわる概念になる(篠原敏昭『「共産党宣言」の共産主義像』篠原敏昭・石塚正英編『共産党宣言—解釈の革新』御茶の水書房, 1998年 所収)。
- 3) 商品生産の所有法則が転化する資本主義的取得法則とは等価なしでの他人労働の取得に帰着する事実については、つぎの文言にもしめされる。「どうして、諸商品は…それらにふくまれる労働時間に比例して交換されるという商品の法則が一変して、資本主義的生産は逆に労働の一部分が交換によらないで取得されることに立脚するということになるのか、…シェルビュリエは、ただ、ここで一つの転変が起きるということを感じているだけである。」(Mehrwert, MEGA, II/3・5, S. 1818, 圈点—マルクス)
- また、「ブルジョア的生産様式の基本条件」(Grundrisse, S. 699)は、「労働者の無所有および対象化された労働による生きた労働の所有すなわち資本による他人労働の取得」(ibid., S. 698)だという文言がある。
- 4) ついでにいえば、個人的所有の再建をもって連合した労働者という主体の強調による生産手段の所有とみなす主張にあっては、その本来の社会的所有とどこが本質的に異なるのかと問われる。

む す び

本稿で、剰余価値生産をあらゆる資本主義的所有をキーワードにすえ、その否定によってうまれる個人的所有の再建とは、他人労働の搾取による生産物の所有の止揚だという命題をといた。その反面で、三つの所有形態の転変にまつわるエンゲルス説には、その中軸にすわる資本主義的所有という概念に千慮の一失がある事実を批判した。資本主義的所有が剰余価値生産をあらゆるとすれば、デューリングを嚆矢とする論争全体のパラダイムは砂のうえにたつ積み木細工のようにくずれる。

ふりかえっていえば、資本主義の廃絶後に再建される個人的所有は、剰余価値生産をあらゆる資本主義的所有が否定されてうまれるから、個人的所有の再建という『資本論』第I巻の最終命題は、あくまで剰余価値生産にまつわる問題である。剰余価値論を核心とする『資本論』第I巻には、搾取の廃絶をもって完結する点で、天衣無縫をおもわせる球体のようなくつきさがある。